平成 30 年度　札幌市研究開発事業　道徳教育に係る実践研究のまとめ

札幌市立八軒西小学校の取組

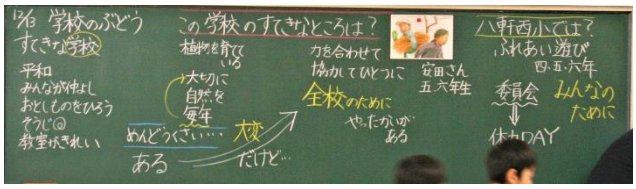
１　道徳科の指導について

・授業づくりのポイント

本校では、教科化元年ということもあり、教科書教材の実践を積み重ねているところである。指導書には、主に３つの主発問が掲載されている。先生方は、その発問の意図を汲み取るところから教材研究を進めている。また、その発問が効果的であるために、教材との出会わせ方や本文に入る前の交流などを工夫している。

・多様な学習展開

道徳科の授業において大切なのは、児童が自らの生き方について考えを深められる場面を設定することである。そのために、本校では主に２つの手立てを工夫している。その一つは、動作化や役割演技である。登場人物に気持ちを重ねるだけではなく、自分だったらどう感じるか、はっきり自覚できる活動になるよう、実践を積み重ねている。もう一つは、板書である。特に道徳科は、気持ちや行為の根拠などが板書に位置付くことも多い。そうした抽象的な言葉を分かりやすく板書し、自分がどこに共感するか考えさせることで、自分の生き方を自覚できるようにしている。（写真参照）



左右に児童の価値観を整理した板書

・学習指導における配慮事項

本校でも、授業の終末に振り返りを書く場面を設けることが多い。ただ、感じたことや自分のことについてなかなか書けない子どもも少なからずいる。そうした子どもには、授業の中で発言の機会を意図的に設けたり、机間指導の場面で個別に関わったりしている。また、学級の全員が板書上にネームカードを位置付ける場面を設け、その子どもの考えを明確にすることも行っている。

２　道徳科の評価について

・評価の工夫と留意点

子どもの考え方や感じ方を見とる方法として、ネームカード、ノートなどを工夫

して活用している。ネームカードは、子どもの考えが明らかになるだけでなく、板書記録を写真に撮って取っておくことでその後の指導や評価に生かすことができる。また、本校にはノートを使用している学級もある。ノートを地道に使っていくと、子どもが今までの授業を振り返ったり、以前の自分の感じ方を確かめたりすることができる。そして、学習の積み重ねを見つめることによって、子どもの成長や変容を見取ることができる。

・校内で共通理解を図るための手だて

今年度、道徳科の評価の研修会を行った。また、校内研究において道徳科を研究する部会があり、その先生方を中心に授業作りや授業後の板書などについて交流を行っている。指導と評価の一体化は、道徳科においても重要である。授業の中で、どのような活動をし、どんな子どもの姿を目指しているのかを念頭に置いて授業していけることが、評価する上で大切なことである。